利尻の医療

◎ 4

新しい風

本州出身の看護婦が活躍

3人が2年超え　仕事に強い意欲

離島の病院に新風が吹いている。都市部よりさらに深刻な看護婦不足の中で、本州出身の女性が、着実な戦力として活躍している。

「利尻に戻ろうか、親元にとどまろうか」。岐阜県出身の看護婦、高村紀美子さん(三)が厳しい選択を突きつけられたのは、二年前の春。日本海の波は、まだ荒かった。

看護雑誌の募集広告にひかれて、島国保中央病院に就職して十日後、岐阜の父親(六二)が脳梗塞(こうそく)で倒れた。半月間、休みをもらって、必死に看病した。父親の意識は戻ったものの、半身まひで長期入院しなければならない。

しょっちゅうけいれんを起こす父親を見守りながら、高村さんの心は揺れた。そんなとき、母親は「あんたが岐阜にいて治るんなら、ずっといてもらう。中途半端なことをしては駄目」と諭した。「親不孝かもしれないけど、島で一生懸命頑張ろう」。そう決心がついた。

試練を乗り越えた高村さんは半年前、島の消防士、洋さん(三)と恋を実らせて結婚。「もう、迷いはありません」と仕事に打ち込んでいる。

島国保中央病院（四十八床）は三年前、看護婦不足にあえいでいた。今の十八人の半数以下のわずか八人。三日に一度回ってくる当直で、疲労は限界に達した。職員は看護婦資格を持つ公務員、教員夫人などを探し歩いた。しかし毎年、春の異動時期になると、次々と島を去っていく。

こんな困難な時期に、本州から相次いで五人の看護婦がやってきた。都合でやめた人もいるが、高村さんをはじめ三人は在勤二年を超えている。

ほかの二人は福岡県出身の中野憲子さん(四三)と渡辺都さん(四三)。二階の病室で脳梗塞の田村ツマさん(八四)を励ましていた。ツマさんはリハビリのため、近く札幌の病院に移る。ボールを握る練習がうまくいかず、「もう年だし…」と弱音を吐くと、「あせらなくていいからね」「歩けるようになって帰ってきてね」と、温かい言葉をかける。

岐阜の父親が脳梗塞で倒れた体験を乗り越え、島で頑張る高村紀美子さん

入院中の田村ツマさんを励ます福岡県出身の中野憲子さん（左）と渡辺都さん

二人は十年前、北九州市の個人病院で意気投合して以来同じ職場で働き、「家族同様の付き合い」を続けている。本州各地のリハビリ病院などを経験して二年前の六月、「地域医療を勉強しよう」と一緒に島に渡った。七月下旬、中野さんの当直の日、死者二人を出す大きな交通事故が起きた。当直勤務は二人。重傷患者のそ生に追われて、ほかの看護婦に連絡する余裕がない。

気が付くと、非番の看護婦が次々と集まってきた。救急車の走り回る音を聞いて、駆けつけたのだ。都会の病院では味わえない連帯感。「みんな仲間なんだね」。うれしくて涙がにじんだ。

渡辺さんは今月十日、静岡県で行われた長女晴美さん(二)の結婚式に出席したばかり。夫と離婚後、女手一つで育て上げた娘の晴れ姿を見届けた。「ほっとしたでしょう。あんたもこので嫁さんにいきなよ」と入院患者に冷やかされた。

利尻生まれで十七年間この病院に勤めている堀田るり子婦長は「本州の人の経験や考え方が、地元の看護婦にも新鮮な刺激を与えています」という。

「必要とされている限り、島で働き続けたい」―。利尻の医療は、道外から来た看護婦の心意気にも支えられている。

◇**看護学校**　医療過疎の道北では昨春、道立稚内高校に看護専攻科（定員四十人）が誕生、旭川、札幌などへ出なくても、正看護婦の受験資格を得られるようになった。市立名寄短大にも今春、道内の国公立短大としては二校目の看護学科（同五十人）が発足、道内の看護学校の偏在は少しずつ是正に向かっている。

この連載企画に感想やご意見をお寄せください。〒住所、名前、年齢、職業、電話番号をお書きのうえ、ファクス011・210・5607か郵便で〒060-91　札幌市中央区大通西三、北海道新聞生活部「利尻の医療」係へ。